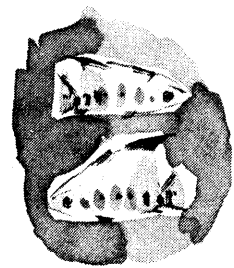


昔話のユング的解釈・その三

浦島太郎

河合 隼雄



浦島太郎の話

今日は浦島太郎の話をしましょう。皆さんの中で浦島の話を知らない人など、まずいなことと思います。ところが、浦島の話はいつごろにできて、もともとの話はどうなものであったか、——これは皆さんの知ってお話とは大分違っているのですが——などについて知っている人は少ないと思います。

ところで、皆さんの知っている浦島太郎のお話はどんなのか、誰かに話をしてもらいましょ。ここで、一人の学生が浦島の話をする) そうですね。大体皆同じような話を知っていると思いますが、これを要約すると、浦島太郎という主人公が、①亀を助ける、②亀の報恩で龍宮へいく、③龍宮で乙姫さまのも

てなしを受ける、④故郷に帰りたくなり、玉手箱をもらって帰る、⑤故郷は全く知らない土地になり、長年月たっていることを知り驚く、⑥玉手箱を開けて、そのため白髪のおじいさんになる、といったお話になると思います。

この話を聞いて、一つ疑問に思うのは、浦島と乙姫の関係です。二人は結婚したのかしなかったのか、皆さんはどう思いますか？ ちょっと皆さん手をあげてください。結婚しなかったと思う人、はい。おもしろいですね、結婚しなかったと知っている人の方が多いようですが、こんなこと調査すると面白いでしょうね。年齢や性による差が出ることだろうと思います。ところで、実は、昔の物語りには浦島と乙姫の結婚のことが、ちゃんと出ているのです。皆さんの知っているのは大分違って

いて、それも時代によって変遷してくるのですが、そのことは後で触れるとして、まず、民話の浦島をとりあげてみることにしましょう。

民話の浦島

民話としての浦島は、関敬吾編の日本昔話集成にいろいろなバリエーションと共に出ています。その中で香川県仲多度郡で採集されたお話が、同氏編の岩波文庫の日本の昔話の方にくわしくのっていますので、ちょっとこれを紹介してみましよう。

「昔、北前の大浦に、浦島太郎という人がいました。七十あって八十に近い、一人の母親と二人でくらしていました。」というのが話の始まりです。浦島は母一人子一人の家族で、しかも四十歳にしてひとり者だとあります。

この浦島が海へ釣りに出かけて、亀を釣ります。これを逃がしてやりましたが、また釣れて三度も逃がしてやります。魚は一向釣れず帰ろうとすると、渡海舟がやってきて「竜宮の乙姫さまからのお迎えじゃ」といって浦島を乗せて竜宮界にいきまします。そこで乙姫さまのもてなしを受け、三年という月日を過ごし、帰ろうとすると乙姫さまは三重ねの玉手箱をくれて、「途方にくれたときにこの箱をあけるがよい」と教えてくれます。

浦島が村に帰って長年月が経っていることを知り驚くのは、

皆さんも知っているとおりでです。ところで、浦島は思案にくれて、乙姫に言われたとおり玉手箱のふたをあけてみると、最初の箱には鶴の羽、二段目は白い煙がはいっていました。その煙のために浦島はじいさんになり、三番目の箱をあけると、これには鏡がはいっていて、これを見ると、自分がじいさんになっていることがわかりました。不思議に思っていると、さっきの鶴の羽が背中についてしまいました。

「そこで飛び上がってお母の墓のまわりを飛んでいると、乙姫さまが亀になって浦島を見に来て、浜へ上がっていました。

鶴と亀とは舞をまうという伊勢音頭は、それからできたものだそうである。」

これが、香川県仲多度郡の浦島です。どうですか、皆さんの知っているのとは大分異なったところがあるでしょう。この本には鹿児島県大島郡で採集された「浦島」というのものがいます。もうその話の紹介はしませんが、これは古事記にある有名な「海幸、山幸」に非常によく似ているところがあることを指摘しておきましょう。なお、こちらのお話には「亀」はでてきません。

もう一つ日本昔話集成に収録されている新潟県南蒲原郡葛巻村のお話をみてみますと、これは、ある魚釣りをしていた男が村人に屋根替をたのみ、自分は魚釣りに行きます。そこで、美

女にさそわれ「水底のさかべつとうの浄土」に行き、歓待され案内した女の婿になります。子ども、孫、ひこ、やさごまでできたが、家のことが心配になり女に送られて帰ると、釣竿はもとのまま、家に帰ると屋根葺の最中だというお話です。

このお話では、男女の結婚のテーマが存在すること、亀がでてこないこと、それに時間の関係が逆で、水底の世界の長時間の体験が、こちらの世界では短時間に相当すること、などが特徴的です。

この他いろいろありますし、これに韓国、中国、アジア諸国のものまで考え出しますと、ずいぶん多くのものになりますが、今回は省略して、初めにあげた民話を基にして、解釈をすすめていきたいと思います。

母一人・子一人

この民話で興味深いのは、浦島太郎が八十歳の母親と一緒に住み、四十歳になってもまだ独身でいる男として語られている点にあります。前にのべましたように、物語りの最初の人物構成は非常に大切です。この話では、母と息子だけで、父親が登場しません。ここでこの物語りの全体を一人の人間の心の状態を表わすものと考え、主人公の男性を、その自我を表わすものと考えてみますと、この自我は母親との結びつきが強く、父性

原理との接触を欠いた状態にあると考えることができます。このような男性の自我はしたがって、自立性を獲得し得ていないと考えられます

このような男性を、心理学では「母親と結びついている子」(mother-bound child)といいます。男性を十分に確立することができず、いつまでも母親に依存しているのですから結婚できるはずがありません。もつとも、結婚していても、社会的、経済的に独立しているのに、心理的には母親との結びつきが切れずにいる人もずいぶん多いものですが。

ところで、このような母親と息子の強い結びつきを強調した、「母一人・子一人」のお話は、世界中の神話や伝説に非常に多くあります。このような現象を説明するものとして、フロイトが近親相姦という点に注目し、すべての人間の心の中にエディプス・コンプレックスが存在すると考えたことは、皆さんよくご存知のことと思います。これに対して、ユングは、そのような点が存在することは認めながらも、この現象をもっと広く解釈し、これを単に、ある男の子とその母親との近親相姦関係であるというふうに個人的なレベルのみではなく、広く人類一般に共通する、人間の自我の成長過程における一つの段階を反映しているものと考えました。つまり、先ほどもいきましたように、この男の子を自我の萌芽のイメージとしてみると、

それがまだ無意識（母で表わされる）と分離できずにいる状態を写すものと考えるわけである。

少し話がむずかしくなりましたが、ここで話をもとに戻してみますと、この四十歳の子どもはひとり海へ漁に出かけることとなります。ところが、魚は一匹も釣れません。海は母性の象徴であり、まさに無意識そのものを表わします。海の上で孤独な状態にあり、しかも魚も釣れないというのは、「貧乏神」のところで前回にお話したのと同様の「退行」が起こっていることを示しています。

おとぎ話の始まりに、この「退行」のテーマはしばしば生じます。日本昔話集成にある福井県坂井郡で収集されたお話では、浦島が母親と往吉へお参りにいき、雑踏の中で母親にはぐれてしまったところから話が始まります。「迷い子」や、森の中に迷いこんだことや、捨子にされることなど、すべて強い退行が始まったことを意味するものです。（この坂井郡のお話では、浦島太郎は継子だということになっています。これも興味深いことですが、ここでは触れずにおきましょう）退行して、無意識の奥深くわけ入った主人公は、そこで、いろいろなものに出会うこととなります。森の中へ迷いこんで、ある人は美しい白鳥を見、ある人はお菓子の家にたどりつきます。

実際、この退行が「創造的退行」であるためには、そこに新

しい要素が生じてくる必要があります。また、主人公もそれにふさわしい努力を拂わねばなりません。われわれのお話の主人公は一体、何に出会ったのでしょうか。民話によると、一匹の亀を釣りあげたとあります。あるいは、われわれのよく知っているお話では、子どもにいじめられていた亀を逃がしてやったということですね。もっとも、新潟県南蒲原郡のお話のように、初めから美女が現われて、亀がでてこない話もありますが、亀のでてくるお話では、その亀が乙姫と直接、関係のあることが示されています。このような点を考慮しながら、この亀について少し考えてみることにしましょう。

亀

亀は日本の伝説や民話などに割によく登場します。まず、日本昔話集成のなかで「龍宮童子」としてまとめられている多くの話では、——これは浦島とはいろんな点で類似できるところが多いお話ですが——乙姫さまの使いとして亀がでてきます。あるいは、先にものべました「海幸、山幸」の物語りで、日本書紀には、豊玉姫が大亀にのって現われてくるのと似ている箇所もあります。このように亀が海、あるいは海底の国に住む女性と関係が深いことが認められます。

あるいは、古事記には、神武天皇の東征のとき、「亀の甲に乗り

て、釣しつ打ち羽振り来る人」が現われ、誰かと尋ねると「僕は国つ神なり」と答え、これが水先案内をしたことがのべられています。つまり、「天つ神」に対する「国つ神」の属性として、亀の甲に乗ることが描かれています。余談になりますが、浦島太郎が亀に乗って龍宮に行くという話は、もともとは無く、江戸時代になってからのことだと言われていますが、そのもとのアイデアをたどっていくと、案外こんな古いところにあるのかもしれない。ともかく、亀が「国つ神」の乗りものとして登場しているのは興味深いことです。

ここで、中国の方を見えますと、「列子」という本に、亀についての面白い話のついています。中国における空想上の山で、不老長寿の世界と同一視されていた五つの山が、遠くの海に浮かんでいるのですが、それが大きい亀の上ののっているのです。この五つの山の名はむずかしいものばかりですが、その最後の蓬萊山というのは皆さんもお聞きになったことと思います。実のところ、浦島伝説の古い記録として存在する日本書紀では、浦島が「とこよのくに」へ行つたと書いてあるのですが、その「とこよのくに」というのに「蓬萊山」の字があてられているので、中国の列子の中の蓬萊山を乗せている亀は、案外、浦島の亀と関係があるのかもしれない。ともあれ、ここでも亀は、海、あるいは、何かの「下」にあるものという意味をもって出てき

ているのです。

また、インドの神話では、ヴィシュヌ神が大海をかきまわすときの棒の土台として、大亀が使われているところがあります。これらの点を見ますと、天と地、精神と肉体(物質)、父と母などの対立を考えると、土、物質、母、などのイメージのまとまりを代表するものとして亀が象徴的な意味をもっていることがわかります。あるいは、もつと極端にいつて、天地、父母などの分離以前の混沌たる状態といつていいかもしれません。そのような意味で、西洋の錬金術において、まだ何も精錬されていない最初の素材——これをマッサコンヒューサといいますが——を亀によつて象徴することがあると、ユングはのべています。

このような意味をもつた亀が登場するのですが、それが非常に劇的な変身をするさまを、丹後国の風土記は見事に描いています。ところでここで浦島についての古い記録についてのおべておきますと、先へのべました、日本書紀、そしてこの丹後国の風土記などは奈良朝時代のずいぶん古いものです。多分一番古いものは、万葉集の高橋蟲麻呂の歌とされている「詠水江浦嶋子一首并短歌」だろうと思います。これらのお話で私が注目したいのは、一番最初に皆さんがよく知っているお話としてあげた浦島太郎の話と大分異なっているところがあるということです。

す。

丹後の風土記をみてみますと、主人公は「筒川の鱺子」とよばれ、「為人、姿容秀美しく、風流なること類なかりき」とあります。これがひとり釣りに出て三日三晩一つの魚も釣れずにいたところ、五色の亀を釣ります。おかしいと思いながら、船の中に置き、しばらく寝ている間に、この亀がたちまち女になります。それは「容美麗しく、更比ふべきものなかりき」というのですから鱺子も驚いてしまいます。ところが、この女性は、「賊妾が意は、天地と畢へ、日月と極まらむとおもふを、但、君は奈何にか、許不の意を早先にせむことを」といいます。つまり、自分の決心は固まっているが、あなたはどう思いますか早く答えてください。とばかり突然にプロポーズしたのでしたら、何とも気の早い話です。このあたりの亀の変身ぶりは真に素晴らしいものと思えますが、ここで不思議に思うのは、「亀の報恩」というテーマが存在しないことです。風土記の話です、この女性はハンサムな男性がひとり舟を浮かべているのを見て、プロポーズするために亀となってやってきたのであって、別に助けられた亀が恩がえしに竜宮城に招待に来たのではないのです。

亀の報恩

事実、奈良朝時代の浦島には、亀の報恩のテーマは存在しません。おそらく、これが物語りの中に取り入れられたのは、御伽草子の中であろうと言われています。つまり、余計なテーマがつけ加わってきたのです。そして、それと同時に、亀が絶世の美人に変身するテーマは消え去ってしまったのです。

時間がありませんので、このあたりのことは簡単にお話ししますが、実は、浦島の話とは別に、「亀の報恩」をテーマとした話があるのです。たとえば、宇治拾遺物語第十三巻の四、「亀を買て放つ事」というお話は、同様の話が、今昔物語や打聞集などにものっているのですが、亀を助けるために買いつけてやったら、あとで亀がそのお金を返してきたという報恩の物語りなのです。あるいは、中国の搜神後記という本にも、亀の報恩の話がのべられています。これらはおそらく、因果応報を説く佛教説話であり、インドに起源があるのではないかと思えます。——まだ私はインドのお話は見えていないのですが——

こんな点を考えますと、もともと素晴らしい美女の変身のお話だったのに、いつの間にか佛教の影響を受けて、動物報恩のテーマがつけ加わった上、大切なテーマが脱落してしまったのだと思われまます。

亀姫と乙姫

今、私は「大切なテーマ」といいましたが、確かに、この亀と女性とのつながりは大切な点と思います。初めにいいましたように、物語りは、母親との結びつき強い男性の退行によって始まっています。そして、それが創造的退行になるためには、何か新しい要素が生じなければ駄目だといいました。その新しい要素が、つまり亀の化身としての美女なのです。母親と結びつき強い男性がそれを断ち切るためには、一人の女、母親とは異なる魅力をそなえた女性に出合わねばなりません。あるいは、違ったいい方をすれば、すべての男性の心の中には、決定的とも言える魅力をそなえた女性像が存在し、無意識界の奥深くはいついていた男性の自我は、このような女性像に必ず遭遇するといってもよいと思います。

男性の無意識内に存在するような女性像を、ユングはアニマ像と呼んでいます。これに対して、女性の場合は男性像が存在するのですが、それはアニムスと呼ばれます。アニムスについては、「眠りの森の美女」の時間にお話するとして、アニマについていいますと、その母胎となるものは、母親像です。しかし、それはだんだんと母親像とは分離して異なった性格をもつようになり、男性の人格の成長に伴って、アニマ像も変遷してゆくことをユングは指摘しています。このことについてもくわしくのべている余裕がありませんが、そのアニマの第一段階

として生じるのは、「生物的なアニマ」とでもいうべきもので、ともかく、肉体をそなえた女性として、子どもが生めるということ、「性」ということが強調された女性像であると言われています。

さて、浦島が母親のところを離れて、海の上であった女性は、どうもこのようなたぐいの女性であったようです。それが亀比賣と呼ばれていることからわかるように、先ほどのような亀の象徴的な意味から考えますと、「低いアニマ像」であることは明らかです。もっとも、外見は絶世の美人で「更比ふべきものなかりき」という素晴らしさだったようですが、美人がすべて「高い」人格をそなえているとは限らないことは、男性にとつて残念な事実であります。このような「低いアニマ」であるから、この女性は、自分から強引なプロポーズをしたのではないかと思われまます。

ところで、浦島はこのプロポーズをすぐに承知してしまいません。そして、この女性の家へ着き、その門のあたりで童子が話合っているのを聞いて、相手の女性が亀比賣^{かめひり}というのだと悟ります。何とも相手の素性も知らぬうちに、女性にプロポーズされ、すぐについて行ったのですから、全くどうかしていると思えますが、こんなところが、母親と結びついている男の特徴のようにも思われます。そして、その夜二人は結婚することにな

ります。

男性が孤独の中で退行現象をおこすとき、それにかこつけて現われた女性の力には抗することができないかもしれません。たとえば、仕事はするが物を食わない女がいたら嫁にほしいと思っていた男が——大体こんな現実性のない虫のよいことを考えるところが退行現象の特徴ですが——そこへ押しかけてきた女が物を食わずに仕事をするというので、嫁にもらったため、あとで恐ろしい目に合うお話があります。これは日本の「飯くわぬ女」という民話で、興味のある人は読んでほしいと思います。結局この女は山うばで、何でもかでものみこんでしまう女なのです。

亀姫はそれほど恐ろしくないようにしても、浦島の心を奪ってしまつて、浦島は現実の世界とのつながりを忘れ、ここに三年もとどまることになってしまいます。つまり、これらの女性像はアニメといつても、まだ母親のネガティブな面を多くもつていて、その何ものも呑みこんだり、かかえこんだりする力によつて、男性の自立を妨げているものといふことができます。

亀姫の強引なプロポーズに対して、これと全く逆の印象を与える女性像を考えると、われわれにおなじみの「かぐや姫」の像が浮かんできます。これは自分からプロポーズするどころか、五人の男性にプロポーズされながら、それをすべて断わつ

て、月の世界へと登つていった美しい女性です。亀姫が海底に住んでいるのに対して、かぐや姫は天上に住んでいます。かぐや姫こそ「永遠の乙女」というのにふさわしい女性でしょう。

ところで、奈良朝時代の乙姫様は浦島とちゃんと結婚しているのに、われわれの知っている浦島はどうして結婚していないのですか。これは桃太郎の場合も同様で、桃太郎の結婚の話は、われわれが子どものときに聞いたお話に出て来ませんでした。もともとの話には結婚話が存在しているのです。このことは、おそらく男女七歳にして席を同じうせずといわれた儒教の教えの日本人に対する影響ではないかと思われまふ。つまり、結婚の話は子どもに話すのは適當でないという配慮が働いたのだと思います。そして、それとすりかえに、亀の報恩のテーマが生じてきたのです。そして、乙姫と亀が分離されて、亀はあくまでも亀で、女性に変身したりすることがなくなった代りに、亀的な要素を失つた乙姫は、結婚の対象としては考えてならない。つまり、かぐや姫の像に接近していったのだと思われまふ。これは、日本人の女性観をよく反映しているようです。上に結びついた、肉体をもつた女としての亀姫か、そうでなかったら結婚の対象とは考えることのできない天上に住むかぐや姫か、この二つに分離してしまつて、天と地、精神と肉体の相克の中に生きる女性を結実させることができないのです。

日本人の女性像

亀姫とかぐや姫、という分離があまりにも著しく、その両者の間にひとつの女性像を結実させることは、日本人にとって非常に困難であるといいました。これは実際はどういうことなのかを示すと共に、心理療法を専門にしている私が、このような浦島の話を生懸命に調べあげたりすることは、何も趣味や遊びのみでしているのではなく、心理療法の実際と結びついた仕事であることを明らかにする意味で、ここに、ある夫婦の事例を簡単に話してみることになりました。

これは、いわば現代の浦島と乙姫の物語りでもあるわけですが、個人の秘密ということもありますので、話は少し省略したり、変えたりしてお話しますので、その点は了承してください。離婚問題で相談に来られた若い夫婦のお話です。

奥さんは「更比ふべきものなかりき」とまでは言えないにしても、なかなかの美人でした。独身時代に、この美人にまいったしまったご主人は、プロポーズをしたところ、たちどころに断わられてしまったそうです。このあたり、この女性はこの男性にとっての「かぐや姫」的存在だったということができません。しかし、このかぐや姫は天に登らず、ずっと下界にいるものですから、男性はあきらめきれず何度もプロポーズをくり

返したのだそうです。

ここまでは、たしかに昔風の日本男性とは大分異なっていると思います。昔の男なら、女であれば誰と結婚してもあまり変わらないと思ったり、女性にいったん断わられたりすると、女のくせに……というわけで見向きもなくなったかもしれせん。あきらめずに一人の女性にプロポーズをくりかえすあたりは大したもので、この女性もついにそれにほだされて結婚します。

ところが、それからが面白いのです。この男性は女性を「自分のもの」にすると、すっかり安心してしまって、自分勝手な行動をとり始めます。かぐや姫は結婚と同時に下落して、亀姫どころか、男の子のためなら何でもしてくれ、甘やかしてくれ「母ちゃん」になることを期待されることになったのです。

ところで、女性の方はどうだったかというところ、愛された人と結婚するのだから、何もかもきつとうまくいくと思っていた「のださうです。つまり、愛する人と結婚するということとは、レースのカーテンがつけられた美しい部屋で、ステレオとカラーテレビをならべて美しい服を着て過ごすのだと思っています。しかし、現実には全く期待に反し、男はわがままを通そうとするものですから、彼女はいろいろな理屈をつけて、アルサロへ内職のために出かけます。これが「かぐや姫」でありた

い彼女の夢ももう一度という願いをこめてなされたものであることは明らかだと思います。実のところ、アルサロというのは、かぐや姫と亀姫との区別をつけられない男性がうようよ集まってくるところなのです。

ところで、この亀姫はたちまち適当な男性を見つけて、二人で逃避行をこころみます。ところが、たちまち金に困ったので——龍宮とちがってこの世はせちがらくできています——女の実家へ行きます。折角、近代的なプロポーズで始まったお話も、このあたりから俄然古くさい日本のお話になってきますね。いざとなると親に頼ろうというのですから。そして、この女の人の父親が怒りもせずに、この二人を迎えてやるのです。

この後で、夫の男性が追いかけてきて、別れる別れないという話になり、相談に来られたのです。この話は表面的には、個人の愛ということを大切に、近代的に生きようとした人たちの話のようですが、ちょっと立ちいって考えてみると、風土記の時代とあまり変わらないほどのものであることが明らかにあります。

この男性について言えば、女性をかぐや姫として見、プロポーズをくり返すあたりはまだ近代的ですが、結婚によって、この女性を「自分のものにした」と考えるや、自分とは異なる一個の人格をそなえた人を愛するということが何を意味するかを

考えてもみない。ただこの女性を自分の「お母ちゃん」としたがつている。また女性の方も、愛するということは「大事にされる」ことであって、それに対して自分が現実にとどのように生きるかという点は無反省で、かぐや姫か乙姫のように、誰かに大事にされて生きることしか考えられない。次に亀姫となって新たに男性を獲得しても、生活のためには父親に頼っていく、この父と娘との結びつきは、最初の夫の、心理的な意味での母との結びつきと対応しているもので、男女の関係がこのような関係でのみ安定していて、一個の人格をもった男性と女性が同一平面上で関係をもつということは、全く至難のことだと考えられるのです。

実際このような男女関係の話が、昔々のことではなく、公害の煙の立ちこめる現代の都会において——それも数多く——実在することを考えてみますと、日本人の男女関係の本質は、神代以来少しでも変化したのだろうかと思わしくさきえなってくるです。

白鳥の乙女

かぐや姫の話と親近性の深いものに「羽衣伝説」があります。このように空をとぶ女性が、下界に現われてくる話は、一般に「白鳥の乙女」の伝説といわれているもので、世界中に類似の

話をもっています。多くの場合、この白鳥の乙女と下界の男性との結婚話を中心となるもので、その結末はいろいろなバリエーションがあります。この白鳥の乙女は、ユングのいうアニメ像の典型としてまことに興味深いのですが、この話をし始めると一年間の講義でもいいつくすことができないでしょう。そこで、私もこの永遠の女性を深追いすることはやめて、日本の白鳥の乙女の話の中できわめて特異な、またそれだけに日本人の女性像をよく反映しているひとつの話を紹介するだけにしておきましょう。

これは浦島の話ののっている丹後国の風土記にある「奈具の社」というお話です。簡単にいいますと、この国の真奈井というところに天女が八人来て水浴みをします。それを見たある老夫婦が天女の一人のころもをかくしてしまい、結局その天女を自分の養女にします。それから十余年の間、この天女はよい酒をつくり、そのため老夫婦は大金持になります。ところが、金持になってしまうとこの夫婦は天女に対して、お前は自分たちの子どもではないからと追い出そうとします。天女は悲しみますが、老人に追い立てられ泣く泣く家を出ます。

これからこの話はどうのように展開すると思いますか。このかわいそうな天女はどうなると思いますか。天女はあちこちとさまよい歩きますが、もう天に帰ることもできず、もちろん身よ

りもありません。この悲しい話の展開として風土記の語るところは天女の心は荒鹽あらしまと異なるところがないので、荒鹽あらしまという地名ができたこと、木にもたれて哭ないたところは哭木なきの村といわれること、そして、奈具の村にきてとうとう心がおさまって、そこにとまったということ。そして、「斯こゝろは謂いはゆる竹野の郡ぐんの奈具なぐの社やしろに坐ます豊字とよあざ賀能賣命かのみことなり。」ということ。話が終わります。

この話を特異だと私がいいましたのは、ここに結婚のテーマが生じないからです。もちろん日本の話はすべてがこうだというわけではありません。わが国における白鳥の乙女の話で結婚のテーマのでてくるものもたくさんあります。しかし、このような話がひとつでもあるということは、日本の特殊性を示しているものと考えられます。白鳥の乙女と男性の結婚ではなく、老夫婦との物語りになってしまふ。そして、ひどい仕打ちをうけた女性を助け出すために王子さまが現われることもなく——眠りの森の美女や白雪姫のことを思い出してください——彼女はなんとなく心を平静にし、最後は簡単に神さまになってしまつて終わるのです。

考えてみると「永遠の乙女」を妻にしようなどというのはあまりにもふらちなことなんでしょう。このふらちなことに挑戦しつづけた西洋において「愛」ということが見いだされ

れていったように、「永遠の乙女」にあえて挑戦せず、そのかなしみに耐えていこうとした日本には「あわれ」ということが見いだされてきたのかもしれない。私は文学的才能がありませんで、じょうずに表現することができませんが、いわば西洋的な観点からみるならば、馬鹿げてさえみえるこの「奈具の社」のお話からだって、十分に美しい「あわれ」を引き出すことができるでしょう。あの有名な小川未明の童話「赤いろうそく」も、こんなところからインスパイヤされて出てきたのではないだろうかと思っております。

深追いしないといえながら、知らぬ間に話が少し横道にそれてしまったようです。浦島ならずとも、やはり乙姫さまというのは男性の心を狂わす力をもっているようです。

日本人の女性像として私が強調したかったことは、日本の男性にとって、それは天上に住む永遠の乙女として、どうしても結婚の対象とならないものか、あるいは泥の中に住む亀姫として、肉体的な面が強調される結婚の対象となるものか、どちらかに分離してしまい、同一平面上に存在し対等な愛の対象となる女性像が、完全に欠落してしまっているということなのです。

無意識の無時間性

さて、風土記の浦島の物語りの方にかえってきますと、浦島

は亀姫のいうままに結婚し、そこに三年間とどまることとなります。浦島が竜宮にとどまった期間は、お話によってはどのくらいかを示していないものもありますが、三年、あるいは三日というのが圧倒的に多いことがわかります。浦島がはじめ海で釣りをしていたときも三日間何も釣れなかったということ、ここにも「三」という数が示されています。三の意味についてはあとで考察するとして、物語りによれば、竜宮での三年は現世での三百年に相当し、このために浦島は帰還後に困り果ててしまうこととなります。

無意識の世界の中にならなくて、そこでアニメ像とめぐりあったときから、浦島の時間感覚は、現世とは異なるものになってしまったのです。無意識内の無時間性ということは、ユングがしばしば強調することですが、われわれはそれを常に夢の中で体験しています。夢の中で、過去と現代が混合したり、瞬時のうちに長時間の体験をしたりすることは珍しくありません。浦島の物語もその無時間性をよく示していますが、興味深いのは始めにちょっと紹介した新潟県のお話のように、竜宮での長時間の体験が、この世では屋根のふき替えをする時間に相当するというわけで、時間関係が逆にとらえられています。これは有名な「邯鄲の夢」の話をおもわせるものがあります。あるいは、御伽草子では竜宮城のありさまをのべているなかに、東

の窓からは春の景色、南には夏、西には秋、北には冬の景色が見えたとありますが、これは竜宮のこの世ならぬ素晴らしさのべると共に、時間の法則の支配を受けていないことを如実に示しているものと思われまゝ。

鎌倉時代にある浦島の物語の記録として「水鏡」「古事談」などがありますが、これらの記述によると、竜宮から帰ってきた浦島が「いとけなかりける形」をしていたとか、「幼童の如し」などとのべられています。これも無意識界の無時間性を示すものですが、浦島が出発したときよりも幼なくなつて帰つてきたというのは、なかなかの興味の深いことです。おそらくこれは、ユングの強調する「始源児」あるいは元型としての子どものテーマにもつながってくるものと思ひますが、ここでは、その点については触れないでおくことにしましょう。

ともかく、このようにして文字通りの時の経つのを忘れてすごしていた浦島も、故郷のことを思い出して、帰りたくなりまゝ。風土記によれば、亀姫はずいぶんと嘆き悲しみますが、玉匣をわたして、「君、終に賤妾を遺れず、眷び尋ねむとならば、堅く匣を握りて、慎、な開き見たまひそ、」といつて、浦島の帰るのを許します。

現実とのつながり

浦島は帰ってきますが、ご存知のとおり、故郷は変わり果てていて、すでに三百年たつていたとか、「尋ねて七世の孫に値はず」(浦島子伝)ということになつて、困り切つてしまうのです。日本書紀にある非常に簡単な記録を除いては、ほとんどの浦島のお話も、浦島の帰国と、玉手箱のテーマを伝えています。

実際、われわれが「今浦島」などというとき、それは亀姫との華やかな体験や、亀を助けるテーマなどよりは、故郷に帰つてきたものの、それがあまりにも変わつて居るために驚いてしまうことを重視していることが多いと思ひます。「あちらの国」の体験をした人が、「こちらの国」へ帰り着いて、変わらぬ生活をするとは本當にむずかしいことなのです。先ほどあげました若い夫婦の例にしましても、あの女性は男性から何度もプロポーズを受けているうちに「あちらの国」にいつてしまつて、こんなに愛してくれるのだから何もかもうまくいくと思ひこんでしまうのです。ところが、結婚と同時に——結婚ということは、あちらの国に住んでいた恋人たちをこちらの国に引きもどすことが多いのですが——たちまちにして、生活が面白くなくなつてくるのです。

われわれはいかに空想の世界や、無意識の世界にはいつていくにしろ、現実とのつながりを失つてしまわないようにすることが、大切であると思ひます。さもなくば、浦島と同様の嘆

きをわれわれはくり返さなければならぬからです。

こんな点から考えてみますと、「あちらの国」へ行きながら「こちらの国」とのつながりを忘れなかった見事な例が、山城国の風土記にのっています。これは「宇治の橋姫」というお話ですが、簡単にいいますと龍神——これが女性なので、この点も考えてみると面白いのですが、省略するとして——にみこまされて聳となった男性が、龍宮で物を食べないようにし、陸へあがってきて食べるようにしていたので、ついにこの世に帰ってくるのができたという話です。「あちらの国」で物を食べると、こちらに帰って来られないというテーマは、わが国の神話のなかの伊弉那美命の黄泉戸喫の話や、ギリシャ神話のペルセフォの物語など、世界中に分布しているものですが、この主人公がそのような心掛けをもっていたために、現実界とのつながりを失わなかったというのは、興味の深い話です。

われわれ心理療法家は、常に人間の無意識界——つまり「あちらの国」——にはいりこんでいくので、現実とのつながりを忘れないようにすることは本当に大切なことと、つくづく思います。

さて浦島太郎はこのような点であまりにも不用意だったようです。亀姫に誘惑されるとすぐに結婚し、故郷が恋しくなるとあまり考えもせず帰ってくる。そこで、乙姫が「開けてはな

ない」という玉手箱をわたしたことは意味の深いことと思えます。ここで、浦島は禁止を守りぬく意志をためかかっていると考へることが出来るからです。退行を創造的ならしめるためには、そこに新しい要素が出現し、主人公は努力を払わねばならないといいました。この点、浦島は努力がなすすぎたのです。

浦島の話にしばしば出てくる「三」という数のテーマは、そこに重要な要素がひとつつけ加わるべきことを示唆しているようです。三と四の象徴性については、ユングはしばしばのべていますが（たとえば「おとぎ話の精神の現象学」）、三という数は力動的なものであり、そこに、ひとつのものが加わって、四という完全数が成立するとユングは考えています。この際、浦島にとって必要なことは乙姫というアニメ像との統合に必要な、意志力をそなえた男性性にあると考えられます。だからこそ、この結婚を成就するために浦島の意志力をためす課題が与えられたと思われれます。そして、われわれの知っている浦島のお話では、浦島はそれを守り切れずに、箱を開けて老人になってしまふのです。

ここに示された「禁止」のテーマは、それを守ることが必ずしも得策でない。禁止を破ることによって、道をひらく例もあることを指摘するだけにして、ここではあまり触れないでおくことにしましょう。ともかく、ここで浦島は自らの意志では

なく、「なんとなく」開けてしまったことが、問題と考えられ
ます。

話の結末

意志の弱い浦島が、現実界に帰って老人になってしまったのは当然のことでしょう。あるいは、この場合は、万葉集にあるような結末の方がふさわしいかもしれません。

「玉櫛すこし開くに、白雲の筥まより出でて、常世辺に棚引き行けば、立ち走り叫び袖振り臥ふいまるび足摺りしつ、勿ちに心消こ失せぬ。若かりし肌も皺みぬ。黒かりし髪も白けぬ。ゆりゆりは息さえ絶えて、後遂に命死にける。」というのですから、この劇の結末としては、死こそふさわしいものと、詩人の心には思われたのでしょう。

話がこのようにすすんでくると、浦島の死や、老人となることを当然と思うものの、一方では、もっと幸福な結末を考えたい希望もわれわれの心に生じてきます。といって、単純にハッピーエンドにするわけにもいかない。ここで物語の筋そのものに変更を加えながら、結末をもう少し違ったものにしようにとすることろみができます。

そのひとつとして、近松の「浦島年代記」というのを見ますとこれは大分手のこんだお話になっていてもとの話を相当潤色

したのですが、結末で浦島が自らの意志をもって玉手箱をあけることになっていきます。話は省略しますが、これは浦島が玉手箱には「八千歳の寿命」がはいっていることを知りながら、悪人をこらしめるため、自分から浦島であることを立証しようとして開けることになっています。近松という人が江戸時代において、人間の自由精神に基づいた作品をよくつくり出した事実を考えますと、この意志的な浦島像の創造は非常に興味深く思われます。ただし、ここでも浦島と乙姫の結婚の成就という結果になっていないことは注目すべきことと思います。

これに対して、始めにあげた民話の結末も面白いものです。これは乙姫の示唆に従って箱があげられます。そして、最後の鶴と亀との出現は、男性と女性、精神と肉体、天と地などの対立物の合一というテーマをほのめかしていますが、これはあくまで、鶴と亀のペアであって、人間の結婚ではありません。つまり、自然に挑戦するのではなく、自然に還ることによっての平安を示しているように思われます。「挑戦」とか「対決」かを内包するものとしてのロマンチックな愛ということを描き出すことは、日本人にとって非常にむずかしいことを、これらの物語は示しているようです。

ところで、このような点から浦島の話に変革をこころみることは、やはり明治以後においてなされていくように思います。

もう時間がなくて、これらについてはあまり触れられませんが、幸田露伴、島崎藤村、森鷗外、坪内逍遙、武者小路実篤などに、浦島を基にした作品があり、おのおのの特徴を示しています。興味のある人は読んでほしいと思います。そのなかで、たとえば藤村の落梅集にある「浦島」という詩の一部を引用してみますと、浦島が釣りをしているとところが一段にあって、次に、

流れ藻の青き葉蔭に

隠れ寄る魚かとばかり

手を延べて水を出でたる

うらわかき処ゆと女のひとり

と第二段に処女が登場し、これが乙姫であることが三段、四段に歌われ、最後に、

竜の宮荒れなげ荒れぬ

捨てて来て海へは入らじ

ああ君の胸にのみこそ

けふよりは住むべかりけれ

と歌われています。

つまり、ここでは乙姫は竜宮を捨てて、浦島の胸の中に住もうと決意する女性として歌われています。これは本当に近代的な女性像を示すものとして注目に値しますが、ここに残念なことは、今まで考察を重ねてきたような亀、玉手箱、などのテ-

マは完全に無現されてしまつて、一体、これがわれわれのよく知っている乙姫さまなのかさえわからなくなっているのです。

この点は武者小路の浦島でもっと極端に示されます。最後のあたりに、浦島が女性にプロポーズして、「あなたは私を愛して下さいますか」というと、女性は「あなたに妾の一生をささげます」などというところが出てきます。しかし、この結末に女性が「ね。この世に竜宮をたてるものの上に幸福を。」という点に示されるように、これは、何だか、「あちらの国」と「こちら

の国」を単純にいれかえただけで、めでたい結婚が出現したような安易さを感じさせられます。

明治以後の小説家たちのこのような努力は、わが国における新しい女性像の探索として、私は興味深く思いますが、何となく不満足な感じを受けるのは、先にのべたような底の浅さのためだと思えます。これらの点については、私ももう少し考察を続けてみたいとは思っています。

物語りの変遷

終りに近づいてずいぶん話を省略してしまつた感がありますが、この話を通じて私のいいかかったことは、浦島というひとつの伝説が時代とともにいろいろと変遷し、その中に日本人の心のあり方の変遷を反映してきていることです。ここで、参

考のために日本書紀にある簡単な記録を示しておきましょう。これは雄略天皇の時代のこととして記載されています。

丹波国余社郡の管川の人、水江浦嶋子、船に乗りて釣す。逆に大亀を得たり、便ち女に化^{なま}為る。是に浦嶋子感^かりて、婦と為し、相逐ひて海に入りぬ。蓬萊山^{とんざいざん}に到りて、仙衆^{せんしゆ}を歴^{めぐ}観る。

これだけのものですが、これが伝説となりおとぎ話となりする間に、今まで考察を重ねてきたような、いろいろなテーマが取り去られたり、つけ加わったりしてきました。

そして、現在われわれが知っているようなお話のように、結婚のテーマが消え失せ、亀の報恩のことが前面に押し出されてきたりはしましたが、やはり、この話が子どもたちの心をとらえるのは、アニメ像としての乙姫の存在が大きい意味をもっていることは明らかだと思います。事実もともとの話は、アニメとの突然の遭遇を描き出すことに重点があったと考えられます。

付記

これはお茶の水女子大学での講義を基にしたものであるが、当日は資料不足のために十分に話せなかつたので、今回発表するにあたって、ほとんど書きあらためたものである。

